

第2回小笠原諸島ネズミ対策検証委員会 議事要旨

日時：平成27年5月7日（木）14：00～16：30

場所：（父島）小笠原村役場2階会議室
（内地）環境省関東地方環境事務所会議室
（母島）小笠原村役場母島支所

出席者：議事概要参照

■委員の意見と対応

- 第2回では、過去の検証のためにマイマイ保護の事業が遅れることを避けるため、現段階で検証できることは緊急的な対策へ活かし、また長期的対策へも活かせるよう切り分けて検証を進める。

（過去事業の検証）

- 過去事業の殺鼠剤の空中散布は、生態系保全のために根絶を目指したことで、農取法の用法用量よりも多く使用された。
- ダイファシノン製剤のパックの耐水性、溶出試験は、海水でも行う必要がある。また、水を交換しながら測定するべきである。
- 空中散布の後にスローパックがどれくらい残り、自然下でどのように分解するかを試験する必要がある。
- ウミガメがスローパックを食べるかどうか、ミシシippアカミミガメでの試験を検討すべき。

（平成26年度事業中止の検証）

- ダイファシノン製剤を選択したかは、非標的種への影響が少ないことが理由であったと整理する。さらに追加試験により検証していく。
- ミスが起こった原因等について、データのミス自体が殺鼠剤の散布量の決定や事業の決定過程へ影響することはなかったが、結果的に住民不信が募ったという大きな問題につながったと分析される。ミスが起きた理由はチェック体制や情報源の明示、住民説明会の本質を踏まえる必要性とあったことであり、今後注意が必要。

（ベイトステーションによる環境影響）

- ベイトステーションの使用は、事後の環境調査で陸水・海水・土壌いずれも検出限界以下であったこと、いずれの方法でも非標的種への直接的な有害性は報告されていないこと、有機物に起因する水質汚濁は観察されていないことが分かっているが、特に、間接的影響については、検討が不十分であり、追加的試験が必要。
- 考えられるリスクの全てを満足するような対策が難しい中で科学委員会はずらい決断をしている。リスクは残るが、最小限にして、途中でも問題解決するなどは可能。
- 検証委員会は、事業を進めるプロセスで何をすべきかを明確にすることが任務である。緊急事態で、ベイトステーションを使うのであれば、検証委員会としては今後、予防的措置やモニタリン

グなどの指摘事項をネズミ対策検討会へ返すことが肝心であり、それらを踏まえて環境省は早急に対応を実施すべきである。

- ベイトステーションは適切に配置することで環境負荷が少ない農薬の使用方で、環境基準を作らなくても良い方法として位置づけられている。過去のベイトステーション使用後の環境影響調査で土壌残留もないことが判明しているのであれば、否定する理由がない。ただし、効果は検証すべきで、ベイトステーションを使ったときネズミがどれくらい減ったかなど、データを取って皆様へ知らせることが大事である。
- 皆さんからの意見で考慮すべき事項として、モニタリングによる効果の把握、非対象種への影響の事前予防策をとる、環境影響をモニタリングする、環境省だけでないネットワークの体制構築、管理手法の確立、西島での対策実施検討、ベイトステーションの適正配置について、検討してほしい。これらの事項を踏まえて、対策を早期に6月までに実現することを検証委員会から検討会へ提言する。また、検証委員会としては長期的にどのようなことに留意すべきかをコミュニケーションをとりながら検証したいが、検討会に対する提言としてもう1点、手法のメリットデメリット踏まえて、長期的なマイマイ保護の戦略を9月までに検討して頂きたい。それを受けて島民とのワークショップを開催して合意形成を進めながら引き続き検証を進めていきたい。

■助言者からの意見

- 魚類への影響は、最も毒成分が蓄積すると思われるハタ類で試験を検討する。風評被害が怖いので、魚が安全かどうかを試験してほしい。
- 喫食性確認試験について、ハトはよく食べると聞いているので、多量摂取時にどんな影響があるか試験で明らかにするべきである。また、ハトへの毒性影響は、カラスのデータで代用するのではなく、ドバト等での試験を検討してほしい。
- 猛禽類の二次毒性は、動物愛護の観点や、猛禽類を外国から購入し試験できるかを、検討すべき。
試験は、優先順位を決めながら行うこと、選択肢を示すことが重要。
- 手撒きは、空中散布より対象範囲をコントロールしやすく、海に流れやすいところを避けるなど、手段の選択肢として残す必要があるため検証に加えてほしい。
- これまで何が行われていたかがわからず、検証のしようがなかったということが不信感につながったと思うため、情報提供は最低限必要である。また、リスクを冒すのであれば、事前の予防措置をどうするか、検証のためのデータをどう集めるか、体制が必要である。
- マイマイ対策の緊急性が高いことはわかってきたため、まずは緊急的にできる対策をとるべき。ただし、検証の試験は継続すべきであり、弱った魚はイルカなどの餌になるため、魚の体内に薬剤が残存するかデータを取ってほしい。
- 西島もネズミによる被害が進んでいるため、早急に実施してほしい。資料3-1の殺鼠剤の使用根拠について、科学的文献に基づくことの確認をお願いしたい。
- ベイトステーションを使う場合にも体制ができていないとコントロールすらできない。
- ベイトステーションの手法では、殺鼠剤が環境中に曝されるのは変わらないため、管理・モニタ

リングをしっかりとやるべき。環境省だけでなく、地域も協力するので、あらゆる手段を取っていくようにしたい。

- 兄島視察に行った時に、思っていたより環境にやさしい作業をしていると思った一方で、やり方が優しすぎるとも思った。緊急的にボランティアをお願いすることも検討すべき。
- 小笠原村役場は、村民の安心安全確保を前提としつつ、マイマイの保全が重要であって危機的状況であることも認識。今後、ベイトステーションで対策を実施する際の体制、コミュニケーション、中長期的なことを含めて役場も一緒に考えていきたい。

■傍聴者意見

- 資料 4 表 4-1 の整理は再考が必要（殺鼠剤空中散布が駆除効果があるというまとめだが、兄島、弟島は失敗している、ベイトステーションの殺鼠剤残剤を回収する場合のコストの算入など）
- 資料 3-2、環境省が会合を効率化するという改善策を具体的に示すべき。コミュニケーションの充実のためには、全体のコミュニケーションを見る人が必要。
- 農薬に不安があるのであれば、人海戦術で仕事ができる環境を作れば頑張っていけると思う。
- 何も手を加えないエリアを設けることが生態系を理解するためにいいのではないか。
- 昆虫にイトトンボも使ってほしい。水質が汚濁されることの影響も必要と思う。

以 上